



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	活動報告
Citation	子ども発達臨床研究, 23, 135-139
Issue Date	2026-06-20
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/99982
Type	other
File Information	11_1882-1707_12.pdf



センター全体

1. センター公開講座

2025年度の公開講座テーマ「子どもの育ちを考える」(1回のみ)をZoomによるオンライン形式で開催した。受講申込数、延べ60名。

【第1回 研究でいじめをへらすことはできるのか? (2025年11月19日)】

- ・講師：加藤 弘通（兼任教員）
- ・聞き手：高田 瞳（札幌市立前田中央小学校教諭／学びの支援コーディネーター）

2. 北大子ども学ゼミナール

2025年度に北大子ども学ゼミナール：「子ども理解」を考える（全3回）を以下の通りに開催した。受講者数37名（うち、全3回修了者数27名）。

【第1回 いま、なぜ「子ども理解か」(2025年10月25日)】

【第2回 子どもをあらわすということ(2025年11月29日)】

【第3回 子どもと環境との関係について(2025年12月20日)】

・講師：川田 学（センター長）

・ゲスト講師（第2回）：宮武 大和（札幌トモエ幼稚園・主幹教諭／センター学外研究員）

3. 北大文庫（地域書店との連携企画）

ダイヤ書房との連携により「北大文庫(全3回)」を企画し、各回の選書を担当した。

【第1回 選書テーマ「世界を、こんなふうに見てみたら」(2025年8月～9月)】

担当：川田 学（センター長）

【第2回 選書テーマ「“へんてこ”や”でこぼこ”は人生のピリ辛スパイスなのさ」(2025年10月～11月)】

担当：岡田 智（専任教員）、南谷 萌（研究支援推進員）

【第3回 選書テーマ「“教育のイメージ”をときほぐしましょう」(2025年12月～2026年1月)】

担当：光本 滋（兼任教員）

子ども発達支援研究部門

1. 「いじめ・児童虐待問題に関わる専門家委員の支援組織の構築」WG（加藤）

3回の勉強会を実施し、いじめ及びいじめの重大事態調査に関する知識を共有した。参加者は、心理師、研究者、弁護士であり、毎回20名程度の者が参加した。

2. いじめ解消と予後のケアに関する研究(加藤・舒)

昨年度に引き続き、リスクアセスメントアプリの実証実験を行い、有効な使用方法と効果検証を



行った。また Erasmus+ の ” Know Bullying “ の International Advisory Board のメンバーとなり、5 月にリュブリャナ（スロベニア）でおこなわれた国際会議 International Conference on Bullying and Violence Prevention で、その成果を報告した。

3. 10 代の性の悩みの分析（加藤）

認定 NPO 法人 3keys と共同で、10 代向けのサイトに寄せられた性の悩み等について分析を行い、その結果を日本青年心理学会第 33 回大会において発表した。

4. 学習支援についての調査（加藤）

さっぽろ青少年女性活動協会と共同で、まなびのサポート事業に参加した中学生とその保護者、サポーターを対象とした調査を行い、本サポート事業が意図する効果について検証を行った。今年度は質問紙をリニューアルし、新たにキャリア意識の形成及び第二反抗期に関する調査項目を新たに加え、分析を行った。

5. 不登校児童生徒及びその保護者を対象とした調査（加藤）

2017 年から行ってきた適応指導教室及び不登校の児童生徒・保護者を対象として調査の成果を学術論文としてまとめた。

6. 異年齢保育の実践論理に関する調査（川田）

「異年齢保育の実践論理：developmentalism に拠らない保育の価値の探求」の 3 年目であった。メンバーは、川田 学（代表者）、及川智博（文教大学）、榊ひとみ（札幌学院大学）、高橋真由美（藤女子大学）、長津詩織（名寄市立大学）、美馬正和（北海道文教大学）、吉川和幸（国立特別支援教育総合研究所）の 7 名である。

2025 年 5 月 29 日に研究の進捗状況についてミー

ティングを行った。主な調査として、2025 年 9 月に共同調査として名古屋市のかわらまち夜間保育園および四日市市こっこ保育園、ことり保育園での観察とインタビュー調査を行った。

7. 北大子ども学ゼミナール（川田）

部局評価再配分事業による保育者を中心としたリカレント教育プログラム開発として、2025 年 10 月～12 月に 3 回の有料講座を開催し、37 名が受講した。詳細はセンター全体の活動記録欄および本紀要掲載の『『北大子ども学ゼミナール』の試み』を参照されたい。

8. 子どもの見守りアプリに関する公開講座（舒）

2025 年 11 月 27 日の北海道教育大学未来の学び協創研究センター第 29 回セミナーに登壇し、子どもの見守りアプリの活用方法について講演を行った。

9. いじめられる子どもが認知している解消条件に関する調査（舒）

2025 年 10 月に S 自治体において、いじめられる子どもが認知しているいじめの解消条件などについて大規模調査を実施した。

10. 高校生への進路指導の効果に関する調査（舒）

2025 年 7 月、石狩市の A 高等学校において、4 日間（合計 8 コマ）の進路支援プログラムを実施し、その効果について調査行なった。調査結果は、日本教師学学会第 27 回大会において発表した。

11. シャボテンログ健康観察アプリの分析（舒）

スタンドバイ（株）と共同で、シャボテンログ健康観察アプリにより収集された小中学生の心身の健康データについて分析を行い、その結果を日本発達心理学会第 37 回大会において発表した。

子ども臨床研究部門

1. セミナー及び研究会

11月8日に「心理学的支援型にこだわるのか？カスタマイズを重視するのか？」と題した公開講座・セミナーを開催した。話題提供は学外研究員山本彩（札幌学院大学）、学外実践家である本阿彌はるな（児童デイサービスおはな）と岡田が話題提供を行い、フロアとのディスカッションを行った（担当：岡田）。

2月2日と3月2日に社会的養護経験者等のアフターケアに関する研究会を開催した。2月2日には、札幌市内で子ども若者支援に取り組む矢後真由美氏（一般社団法人 おちゃのま SO- 縁）、太田千代氏（特定非営利法人 ねっこぼっこのいえ）に話題提供をいただき、フロアとのディスカッションを行った。3月2日には特定非営利法人 インターナショナル・フォスターケア・アライアンス (IFCA) で当事者活動（ユースアドボカシー）に取り組む社会的養護経験者を招聘して「当事者が語る社会的養護」と題したシンポジウムを開催し、フロアとのディスカッションを行った（担当：井出）。

2. ディスレクシア支援室（関）

本支援室での相談・支援活動は、医療機関等で既に学習障害の診断を受けている事例を対象とし、研究協力への同意の下に行っている。学習到達度の評価や認知機能評価を行い、その結果に基づいて心理・教育的な指導方法の提案・実施を行う。また本活動には、公認心理師課程・大学院の心理実践演習Ⅳとして実習生も参加している。

前期には個別の指導計画に基づく個別支援、後期は新規紹介ケースの評価と中学校進学に向けた評価・助言を行なった。運営は教員1名、リサーチアシスタント1名が中心となって行い、支援・評価は学習神経心理学研究室の大学院生および心

理実践演習Ⅳの実習生2名が担当した。本年度の参加者（研究協力者）は小学2年生から高校生までの9名（新規5名／再来4名）、のべ57名（3月末時点）であった。

また、支援室でこれまでに行なった書字に関わる認知機能評価の結果について、昨年度 RA を担当した院生（柳内景太）が論文にまとめ発表した。

3. RTI モデルを用いたひらがな音読支援（関）

江別市教育委員会と連携し、「T式ひらがな音読支援」による支援を行っている。この支援法では、在籍する全ての1年生を対象として学期ごとにひらがな音読能力を評価し、その結果に基づいて短時間の読み練習を行う。さらに支援が必要な児童には2年時に週1回の個別指導を行う。学期毎の評価と読み練習・個別支援は教員が中心となって行い、センター側は学校から受け取った検査結果の評価・分析を行った。

また、昨年度行った支援後の追跡調査（1年次の支援に参加した4～6年生を対象とする読解力の調査）について、調査結果をまとめ学会報告を行った。さらに、あらたに1校より協力が得られた。

4. 周縁化された子ども・若者への心理支援を行う支援者トレーニングの開発（井出）

科研費学術変革領域研究(A)公募研究(23H04438：貧困下にある子どもに有効な支援を提供する心理支援者育成プログラムの開発)の助成を受けた一連の研究成果をもとにして、低所得と経済的疎外 (Low Income and Economic Marginalization: LIEM) の影響を受けた人々への心理支援に関する心理支援者向けの研修プログラムを開発し、心理支援者向けの研修会（オンデマンド）を提供した。期間を通じて212名が受講した。

5. 社会的養護経験者の高等教育進学支援の社会実装に関する実践研究（井出）

ワシントン州立大学バンクーバー校の Salazar 氏によって開発され、米国で実践が重ねられてきた Fostering Higher Education (FHE) の社会実装に関する試行的実践研究を行った。FHE は社会的養護経験者の高等教育への進学への動機づけを高めると共に進学後、就学を継続するために必要な支援をメンタリングを用いた伴走支援によって実現する取り組みである。高等教育への進学を希望する北海道内の社会的養護経験者に対して FHE を適用し、日本における実践上の課題や効果の検証を行っている。

6. 発達障害のある幼児・児童を対象にした認知発達縦断研究及び相談窓口（岡田）

就学前の認知発達及び発達障害特性のアセスメントの長期的安定性や就学後の予測的妥当性を検証するために、就学前から就学後の子どもの認知及び発達障害特性を縦断的に追っていく調査を

2021 年度から行っている。2025 年度は東京都及び北海道の幼稚園での実行機能と適応昨日の評価に関する調査を行った。保育者と保護者の評定者間のディスクレパンシーの臨床的意味について検討した（調査実施者：博士課程 3 年張亜倩）。また、これまでに調査に協力した家族 2 組がフォローアップ相談を申込み、相談を行った。

7. 発達障害のある思春期児童を対象にしたソーシャルスキルグループの実践（岡田）

学外研究員山本彩（札幌学院大学）、現場実践家である本阿彌はるな（児童デイサービスおはな）、小山内美穂（放課後等デイサービスはな）、リサーチアシスタント石崎滉介、張亜倩とで、思春期の発達障害のある子ども 6 名に対してへのソーシャルスキルトレーニング（SST）の実践活動を 14 セッション行った。このプログラムは PEERS® を基にした。大学院の心理実践実習Ⅳの実習生も 2 名が参加した。

教職高度化研究部門

2025 年度の教職高度化研究部門は光本滋教授、篠原岳司准教授の構成になった。以下、当部門の今年度の主たる活動について報告したい。

（1）福井雅英氏の講演会の実施

2025 年 11 月 29 日（土）に、福井雅英氏（滋賀県立大学・非常勤）の講演会を開催した。報告タイトルは「教師の子ども理解と実践・研究コミュニティの形成 ―『「質の高い教師」とは何か』に込めた願い―」である。当日は 25 名ほどの学校の現職教師、研究者、学生たちと共に、今日の教師が置かれた状況を踏まえながら、教師の子ども理解にとって大切な本質である子どもの発達要求について、そして協働による子ども理解のカンファレンスの価値について議論する機会を得た。

この講演の記録は、本冊子に掲載している。詳細はそちらを参照いただきたい。

（2）セミナー「教職課程改革の動向と教員養成の課題」の実施

現在、中央教育審議会教員養成部会は、「社会の変化・学習指導要領改訂等を見据えた教職課程の在り方の検討を深める」として、教職課程の大きな改変につながる検討をおこなっている。2025 年 12 月の「教職課程・免許・大学院課程ワーキンググループ」の中間まとめでは、1 種免許と 2 種免許の区分廃止、必修単位数削減、そして教職科目の再編（①教科と教科外の統合（「教科指導等」）、②教育の理解が時事的、政策的なもの中心に、③教育実習と教職実践演習の分離、④中学校

に特別支援学校（学級）の実習を追加、⑤大学設定科目の廃止、⑥「教免法 66 条 6 に定める科目」と一般教育科目の分離」といった方向を打ち出した。これらは、大学における教員養成の理念にかかわることから、光本滋教授より今日の改革動向の内容整理と論点提示が行われ、参加者で議論が行われた。今後も中教審の「教職課程・免許制度全体の見直し」の内容を批判的に検討し、大学における教員養成の意義を確認、発展させるにはどうしたらよいかを探っていききたい。

（３）「新たな教師の学び」に対応したオンライン 研修コンテンツ開発事業

2022 年の教育公務員特例法改正（2023 年 4 月施行）により、教員免許更新制が廃止されるとともに、教員の研修履歴を記録し、教育委員会の研

修計画とリンクする新たな研修管理の仕組みが制度化された。これに伴い、文部科学省は教員の研修歴の記録と大学・教育委員会等が主催する研修を整理・提供する機能を備えた「全国教員研修プラットフォーム（Plant）」の整備を進めている。

2025 年度、教職高度化研究部門は、標記の補助金事業の経費を用いて Plant に掲載するオンデマンド研修の開発に取り組んだ。研修の内容は、受講者が、①自身のライフコース、②研修と関連する学びに関するワークシート作成に取り組み、③同様の作業を経た教師のインタビュー動画を視聴することにより、教職のふりかえりと意義、および研修の課題の確認を行う、というものである。5 名の教師のインタビュー動画の制作を学生・大学院生の協力により進め、公開へ向けて準備中である。

